

2025 年 5 月 8 日

日本ロシア文学会
会長 中村唯史様

企画代表
堤 縁華

日本ロシア文学会主催若手ワークショップ
「時の脱臼——スラヴ・ユーラシアの文学・芸術における^{アナクロニズム}錯時性」
実施報告書

若手ワークショップ企画の実施について、下記の通りご報告申し上げます。

1. 日時：2025 年 3 月 8 日（土）13 時 30 分~17 時 30 分
2. 場所：東京大学駒場キャンパス 18 号館 4F コラボレーションルーム 1
3. プログラム

奥村文音（東京外国語大学大学院・博士後期課程）

「組み替え可能な時間——フレーブニコフにおける錯時的現象の内部構造」

李博聞（京都大学大学院・博士後期課程）

「錯時的同時性の奇跡——パステルナーク「幾らかの状況」における時間と芸術」

石野慶一郎（東京大学大学院・博士後期課程）

「カリカチュアにおける錯時性——ドレフュス事件からシャルリ・エブド襲撃事件まで」

佐藤大雅（法政大学大学院・博士後期課程）

「ソ連の〈新印象主義〉——サッタル・バフルルザーデをめぐって」

堤縁華（東京大学大学院・博士後期課程）

「停滞と渋滞、あるいはソ連とポスト・ソ連——アクラム・アイリスリ『大いなる渋滞』
試論」

コメンテーター

貝澤哉（早稲田大学・教授）

コメンテーター・アドバイザー 乗松亨平（東京大学・教授）

4. 運営

4.1. 発表準備

発表者は若手企画賞応募の段階から、ワークショップの問題意識を明確化させるために、4回にわたり読書会と討議を行った。テーマ決定後も、読書会を3回行い、関連する諸理論について幅広く検討した。1月に発表要旨の検討会を行い、3月の開催直前にも発表原稿の検討会を実施した。

4.2. オンライン配信と事前登録

オンライン配信にあたっては Zoom を使用した。対面・オンラインともに事前登録制とし、参加登録には Google フォーム及び Zoom の参加登録フォームを使用した。オンライン参加者にはメールで資料を配布した。

4.3. 当日の設営・運営

開場 1~2 時間前より、会場設備の設定、ポスターの掲示、配布資料の設置等を行なった。当日の運営に係る庶務については、浜渦理起氏（東京大学大学院）の協力を得た。

5. 参加人数（途中退席者含む）

参加登録者数 43 名

対面 9 名 （発表者・コメンテーターを除く）

オンライン 27 名

6. ポスター



7. 会計 別紙「会計報告書」参照

資料（企画趣旨・発表要旨）

日本ロシア文学会主催若手ワークショップ

「時の脱臼——スラヴ・ユーラシアの文学・芸術における^{アナクロニズム}錯時性」

堤縁華〔代表〕、奥村文音、李博聞、石野慶一郎、佐藤大雅、貝澤哉、乗松亨平

1. 企画趣旨

——この世の関節がはずれてしまったのだ（*The time is out of joint*）。

なんの因果か、それを直す役目を押しつけられるとは！

ウィリアム・シェイクスピア『ハムレット』（福田恆存訳）

本ワークショップでは、ロシア・ソ連及びその周辺の文学・芸術におけるアナクロニズムの問題を検討した。本ワークショップにおいて、アナクロニズムとは、「時代遅れ」や「時代錯誤」の意味に限らず、あらゆる時間の交錯、すなわち「錯時性」を含意するものとした。^{アナクロニズム}錯時性というテーマは、歴史や社会についての単線的な議論に対する省察、素早く流れる現代の時間に対する疑問、異なる「速度」をもって緊迫した世界情勢を眼差す試みなどの問題意識に基づいたものである。

^{アナクロニズム}錯時性という状態がもち得る意義を具体化するために、本ワークショップではさらに「反-同時（代）性」という概念を補助線として議論を行った。「反-同時性」は、同時化への抵抗や、クロノロジックではない時間の可能性を念頭に置いたものである。「反-同時代性」は、異なる時代との対話や、時代の主流に流されないことを意識したものである。これらの意味において^{アナクロニズム}錯時性は、従来の時間感覚に対するアンチテーゼとして、積極的な意味をもつと考えられる。

ワークショップの構成としては、大まかに前半（奥村、李）と後半（石野、佐藤、堤）で、それぞれ反同時性と反同時代性を切り口に、アナクロニズムの問題を検討した。前半では、時間概念自体に焦点が当てられ、後半では、社会的・歴史的側面が強調された。

本ワークショップの問題意識を明確化するにあたって、ディディ＝ユベルマン、デリダ、ジャンケレヴィッチ、井筒俊彦などの議論を幅広く参照したが、メインタイトルの「時の脱臼」は、シェイクスピアの『ハムレット』からきている。「*The time is out of joint*」、直訳すれば、「時間が脱臼してしまったのだ」というハムレットの有名なセリフは、「この世の関節がはずれてしまったのだ」とも訳される。「関節がはずれてしまった」ような現在の世界情勢に、即時的な応答を行うことは本ワークショップの企図ではないが、異なる時間についての思索は、異なる世界についての思索とも大きく重なるものでもある。

2. 発表要旨

組み替え可能な時間 ——フレイブニコフにおける錯時的現象の内部構造 奥村文音（東京外国語大学博士後期課程）

本発表では、フレイブニコフの時間と空間をめぐる思索に注目しつつ、彼の著作中のクロノロジーを無視したかのようにみえる諸現象の内部構造について検討した。初期の論考で提唱された生物学的概念「メタビオース」の例に見られるように、フレイブニコフに特徴的な時間観の一つとして、ある時間的間隔の「かたまり」の連続体としての時間の捉え方があげられる。そこには、時間に対する空間の優位という状況を打破すべきであるという彼の問題意識が密接に関わっており、発表では彼の論考やメモを手掛かりに、そうした考えに至った背景やその思索の道筋を概観した。その後、発表前半に論じたような時間観が作品にどのような形で表れているかを観察すべく小説『カー』を取り上げ、そこではブロック化された時間の「かたまり」の間でさらに「組み替え」が生じていることで、複雑な時空間構造が生みだされているという理解に至った。

錯時的同時性の奇跡 ——パステルナーク「幾らかの状況」における時間と芸術 李博聞（京都大学大学院博士後期課程）

本発表では、象徴派からの独立を謳い、詩学における未来主義を宣言した、詩人ボリス・パステルナークのエッセイ「幾らかの状況」（1922）を取り上げ、そこで提示される非直線の時間観という「反近代的時間」を分析した。

発表の前半では、パステルナーク作品における新カント派的な時間の範疇の定義を皮切りに、彼の論文における「即興」の概念を踏まえて、パステルナークの詩学における点状の時間の形成——現実の時間的経験がアイデアの点に圧縮される——を説明した。

発表の後半では、「幾らかの状況」における独自の時間観を分析した。パステルナークは文学的生産における作者・作中人物・読者の先後順序を否定し、詩と散文の文体的相互作用がもたらす作者・作中人物・読者が共有する同時性を論じている。詩は点状の時間による圧縮作用で時間を無効化し、散文は全ての時代を同時代と偽装する。この時間の無効化と同時化によって、本来は異なる時間に属している作者・作中人物・読者が経験を共有できる。

本発表を通じて、パステルナークが唱える「錯時的同時性の奇跡」——非直線の時間を通じて芸術に内在する「錯時性」と「永遠性」の逆説を解決する理論——が明らかになった。

カリカチュアにおける錯時性（アナクロニズム）
——ドレフュス事件からシャルリ・エブド襲撃事件まで
石野慶一郎（東京大学大学院博士後期課程）

本発表では、「カリカチュアにおける錯時性（アナクロニズム）」と題して、カリカチュアに付き纏うアナクロニズムの問題を検討し、旧来的な意味でのアナクロニズムが破綻しつつある現代の状況について整理した。

そのためにまず、ロシア出身の風刺画家カラン・ダッシュがドレフュス事件にさいして描いたカリカチュアを分析し、カリカチュアがハイコンテクストなメディアであることを確認しつつ、それゆえにアナクロニズムを回避することに困難が伴うことを明らかにした。

つづいて、この困難に関与するカリカチュアの「約束事」について、そもそも「約束事」が問題化されたこと自体、時代に依存する変化であり、ここに時代錯誤が生じる可能性が二重化していることを指摘した。

最後に、シャルリ・エブド襲撃事件について検討し、カリカチュアをめぐるこの事件において、かつてなくシンクロしたとも思われる世界においては、時代の違いにかぎらず、むしろ同時代的にすら錯誤が発生し得る状況——「アナクロ無きアナクロニズム」——が問題として提示された。

ソ連の〈新印象主義〉
——サッター・バフルルザーデをめぐる
佐藤大雅（法政大学大学院博士後期課程）

本発表では、ソ連期アゼルバイジャンの画家であるサッター・バフルルザーデ(1909-1974)を取り上げ、ソ連公式絵画における〈新印象主義〉の展開について検討した。点描画法を導入したバフルルザーデの作風は、同時代のソ連絵画においてほとんど類例を見ないものであり、彼は「反-同時代」的な画家として捉えられる。ソ連における印象主義の動向を整理しつつ、バフルルザーデと新印象派／ポスト印象派絵画の関係を明らかにした。その結果、以下の結論が導出された。

- ① 初期のバフルルザーデは、公式の規範に則る形でロシア・リアリズムを経由している。そして／或いは、1930年代のモスクワ滞在中に印象派絵画を実見し、その技法を参照している。
- ② 1960年代のバフルルザーデは、同時代の社会主義リアリズム絵画から見て、「反-同時（代）性」の要素が強い。但し、1960年代に起こったバフルルザーデの作風の変化は、ソ連期における印象主義に対する「雪どけ」と部分的に呼応している。
- ③ バフルルザーデ自身は、印象派～新印象派～ポスト印象派というフランス印象派の系譜をなぞるように、クロノロジックな展開を見せている。約50年後のソ連において、フランス印象派の系譜が反復されている。

停滞と渋滞、あるいはソ連とポスト・ソ連
——アクラム・アイリスリ『大いなる渋滞』試論
堤縁華（東京大学大学院博士後期課程）

本発表では、アゼルバイジャンの作家アクラム・アイリスリ（Əkrəm Əylisli; Акрам Айлисли、1937-）の小説『大いなる渋滞』（Möhtəşəm tıxas; Грандиозная пробка）を分析し、作品が描き、そして作品を取り巻く政治的・社会的状況と、そこに内在する錯時性^{アナクロニズム}を検討した。まず、『大いなる渋滞』における渋滞のモチーフは、独裁体制による国家的な行き詰まりを示すものであると論証した。続いて作中で、社会的な停滞が、「時間／時代自体ではなく、何らかの二つの時間／時代の「あいだ」を生きている」感覚を人々にもたらしことに注目し、それをソ連からポスト・ソ連への移行の不完全性と関連づけた。アリエフ政権と「停滞の時代」の関係を念頭に、『大いなる渋滞』の批判対象は、ポスト・ソ連期アゼルバイジャンの政治における錯時的^{アナクロニズム}な状況にあると主張した。また、ソ連時代にも、ポスト・ソ連時代にも体制と同調しないアイリスリは、反-同時代性^{アナクロニズム}の作家でもあると提示した。補論では、『大いなる渋滞』における独裁者の描写を現実の人物と照らし合わせ、虚実が交錯する本作品の批判的なポテンシャルを検討した。

3. ディスカッション

〈コメント1〉 コメンテーター：貝澤哉

ディディ＝ユベルマンが、時間を強調する歴史学の一部である美術史に対抗して、わざと時間を外す「アナクロニズム」を自分の方法と唱えることから、アナクロニズムの特徴が見えるだろう。バフチンは「笑いの精神からの小説の誕生」で、「時の脱臼」というハムレットの名台詞を連続した時代が切断される点として説明する。ベンヤミンも、連続した歴史的時間に断裂の瞬間を見出し、そのなかで非連続なイメージが瞬間によって連結することが本当の歴史だと言う。近代の時間感覚に対する批判として出現した、ベルクソンの「持続」、フッサールの『内的時間意識の現象学』やハイデガーの『存在と時間』など19世紀末以降の時間に関する理論は、どれも時間を線状的・不可逆的なものと見ないわけだ。

パステルナークの師だったマールブルク学派の哲学者、晩年にユダヤ思想に転身していたヘルマン・コーエンは、メシアニズムと終末論の違いを指摘している。彼の観点によると、終末論は完全に決定論的であり、未来のことはすでに過去において決められている一方、メシアニズムはつねに未来において到来する「開かれた現在」である。こうした議論をもとにしてあえて図式化するなら、未来を現在や過去のなかに先取りする「時代錯誤」とは、いわば、我々の実存そのものの超越論的な条件である。そもそも我々が生きている時間性自体が錯誤的であると言ってもよいかもしれない。

〈コメント2〉 コメンテーター：乗松亨平

アナクロニズムとは本来、シンクロニシティという前提がまずあって、それに対する「アンチ」としてのみ定義しうるものである。今回のワークショップにおいては、「過去・現在・未来というクロノロジー」ないし「あるコンテクストの共有」といったものが、アナクロニズムの成立条件としてのシンクロニシティとして想定されていたわけだが、後者については、もはやその「コンテクストの共有」「正しい理解」という前提自体が不確かなものになってきているのだと思う。現代では社会制度やメディア技術などにより個々の人間のシンクロニシティが高まったことで、逆にシンクロしない他者の存在が可視化され、シンクロニシティという概念への信頼そのものが揺らいできている。シンクロ・アナクロという対立構造自体が、もはやアナクロニズム的な考え方になりつつあるのかもしれない。

〈質疑応答〉

Q. フレーブニコフの作品では時間と空間の軸が比較的容易に切り替わり得るような印象があるが、それは先に述べた生の時間の超越論的錯時性という問題に触れていると同時に、世界観の問題、ひいては詩学の問題でもある。時間と空間の融通無礙な関係性は、ヤコブソンが選択・結合の二つの系列の交錯という形で説明したような、ポエティクスの原理そのものに通ずるだろう。フレーブニコフ自身は、そうしたことを自覚していたのか。(貝澤)

A. フレーブニコフの詩に頻出の「天の川」のメタファーや、詩の構造、そして造語にいたるまで、彼の詩学の実に様々な次元において、「層状に積み重なった時間と、その層がすべて透けてみえているような空間」とでもいうべきイメージが共通しているように思う。自覚的かどうかは不明だが、たとえ無自覚にしろ、彼の中でそのように色々な次元のイメージが重なり合っていたことはあり得るだろう。(奥村)

Q. ヤコブソンはパステルナークの詩におけるメトニミーの優位性を指摘しているが、この現象とパステルナークの理論との間にはいかなる関係があるか。パステルナークはメトニミーを意識して創作したか。(貝澤)

A. ヤコブソンの「メトニミー」概念について、ヤコブソンが構文における隣接性が散文の叙述的特徴だと唱える一方、パステルナークは隣接性における言葉の間の間隔がアイデアへの障害であると指摘し、距離ゼロの「重層化」を求めている。「幾らかの状況」の原稿では、流れを破り新たな境地へ進むというような文言もあるので、むしろ彼は「メトニミー破壊」を意識して創作したとも言えよう。(李)

Q. パステルナークの時間観は、マンデリシュタムのエッセイ「言葉と文化」を想起させるが、両者間の個人的交流は少ない。二人の類似は当時の「時代的空気感」によると言えるか。発表はパステルナーク詩学の転換の原因を主に個人的経験に見出していたが、時代背景からの影響はあるか。(前田)

A. 二人が互いを評論したことはあるので、この類似性は二人がお互いの著作を読んでいた

ためだとある程度は言えるかもしれない。当時、全一的な世界観が文化の主流となっており、二人が類似の時間観を形成したとしたら、それは偶然とは言えない。パステルナークの場合、彼は特に二月革命を体験してから現代に対する意識が強くなったかもしれない。(李)

Q. カリカチュアそのものの時間性、あるいはメディア的特性とは何か。カリカチュアが市民や大衆に訴えかけるものだったとして、カリカチュアのメディアの特性はどう影響しているか。(貝澤)

A. カリカチュアはそれが描かれた時代と強く結びつき、当時の時代をいわば冷凍保存するような時間性を帯びている。カリカチュアには、とりわけ 18 世紀から 19 世紀にかけて新聞・雑誌というメディアとともに発展してきた歴史があり、そのときには、新聞・雑誌が届く範囲が物理的に限られていたためにむしろ、それが届く範囲のコミュニティの紐帯を強める効果があった。その効果は、発表内でも確認したように、啓蒙にも権力批判にもなり得た。(石野)

Q. カリカチュアの知覚自体が、別のメディアの台頭により変容してきているのではないか。YouTube や SNS の時代にあって、カリカチュアというメディアをどう捉えればよいか。(貝澤)

A. いまの時代、たとえばインスタグラムや X (Twitter) 等で拡散されるカリカチュアの例もある。それらは連帯や怒りを共有するためであったり、旧来的な権力批判の役割を持たされていることもある。こうした受容が、従来の知覚のされ方とどう異なるかは一概には明言し難く、今後の課題として検討したい。(石野)

Q. グロイスによれば、社会主義リアリズムは過去の芸術様式を無時間的に引用した一方、アヴァンギャルドは美術史のクロノロジーに意識的だった。バフルルザーデは前者に反抗し、アヴァンギャルドを再演したと捉えられないか。(乗松)

A. 発表内では触れなかったが、バフルルザーデは「ユロージヴィ」的な位置付けの人物であり、自身の作風の変化について深い意図を抱いていなかったと考える。(佐藤)

Q. 現在のアゼルバイジャンにおいて、主にナショナリズムに起因して、バフルルザーデの特異性が強調されるという話があったが、彼の創作の中に「アゼルバイジャン的」な様式が見出されているということか。(乗松)

A. ロシア以外のソ連構成国では、「形式においては民族的、内容においては社会主義的」という社会主義リアリズムのテーゼに則り、民族的なモチーフを取り入れる作例が多く見られるが、バフルルザーデも同様であった。他方、現在のアゼルバイジャンでは、バフルルザーデの社会主義リアリズム的側面が無視されている。バフルルザーデが社会主義リアリズムに抗いながら独自のスタイルを築き、民族的な意識からナショナル・シンボルを多用した画家であったという言説が形成されつつあると考える。(佐藤)

Q. スーラやシニャックは色彩学に基づいているが、バフルルザーデは体系化された点描理

論に基づいて創作していたのか。また、フランス印象派は独自の時間感覚を持っていたが、バフルルザーデの場合はどうか。(貝澤)

A. バフルルザーデは補色対比の厳密な理論を意識していなかったと考える。バフルルザーデは早書きであり、新印象派が長い時間をかけて創作するのとは異なる。むしろ、印象派的な時間感覚を有していたと考える。(佐藤)

Q. ポスト・ソ連政権を「ソ連時代への逆戻り」として批判するアイリスリに対する反論として、(1) 逆戻りして何が問題なのかという立場(ソ連ノスタルジーや、旧ソ連地域の歴史を円環や振り子の運動として捉える観点)、(2) 逆戻り自体を否定する立場(現在はかつてとは異なる国家資本主義であるという見方)が想定される。上記についてどう考えるか。(乗松)

A. アゼルバイジャンで、現政権をソ連時代への逆戻りとして捉えているのは少数派だと考えられる。一方、アゼルバイジャン人民共和国の歴史やロシア帝国時代の啓蒙文学など、ソ連以前の遺産は強く意識されている。アイリスリに関しては、過去志向、ソ連への評価、彼が生きた過去がソ連であった事実、という三つの側面から検討する必要がある。(堤)

Q. アイリスリはマジック・リアリズムなど、技法やジャンルに対して意識的な作家なのか。アゼルバイジャン文学において、それは一般的なのか。(貝澤)

A. 前期から後期にかけて、方法論的な変化は見られるものの、アイリスリはそれほど技法に重きを置いていないように思われる。アゼルバイジャン文学において、特定の技法やジャンルが特権化される傾向は顕著ではないが、風刺文学の伝統は強い影響力をもつ。(堤)